

大量難民という報道されない究極の地獄

平和統一 NEWS No. 85 (2015/9 月号)

渡辺 久義

私の治める国から離れたある国に、豊かな油田をもつ国があったとしよう。私は世界の 8 割の富を手中にしているから、これ以上石油などを欲しがるのはおかしいようだが、そういうわけにいかない。私の目的は、物心すべてを含めて世界の完全制覇だから、私の思い通りにならない国があってはならない。私は狙った国すべてを従属させるために、クーデタなど暴力を用いても、私に従う政権を立てなければならない。それがうまく行かなければ、戦争を起こさなければならない。戦争は悪だと言われるが、私には軍需産業は重要な収入源だから、私と私の一族にとってはむしろ必要不可欠であり、確かに大勢の人が死ぬが、もともと私の世界制覇計画の一環として世界人口削減があるので、それは歓迎すべきことだ。

したがって私の始める戦争は、武器をもって我々に刃向う者だけに対してではない（そんな者はほとんどいない）。子供を含めた一般市民が標的である。一般市民はすべて我々を憎むテロリスト、つまり世界平和を脅かす者たちだから、彼らこそ根絶やしにしなければならない。私はそういう残忍な仕事は、たいていカネで動く傭兵にやらせている。これらの傭兵はもともと我々が育てたものだが、それを隠すために、たまに彼らを攻撃することもある。私にとっては、プロパガンダ、特にメディアによる言論統制が最も重要だ。

しかしジェノサイド（民族抹殺）作戦といっても、全部が死ぬわけではない。かなり多数の者が生き残るが、彼らは職を失い、インフラを破壊され、食料も水もなくなったこの土地で生きていくことができない。そこで彼らは難民となってどこかへ出かけるよりほかない。それだけでもかなりの悲劇である。しかし人間どもの本当の悲劇が始まるのは、そこからであり、私のようなサタンに仕える者にとっては、この究極の地獄こそ究極の喜びなのだ。

——話をわかりやすくするために、このように書いてみたが、実際このように書かなければ、今起きていることは説明できないだろう。「同じ人間である以上、そこまで悪い奴がいるとは考えられない」と、たいていの人がある。しかしこの「同じ人間」というのが、情勢判断の間違いの生ずる思い違いの一つだ、と書いていた人がいる（名前は思い出せないが）。詳しくはここで説明できないが、知っている人も今はかなりいると思われる。あるテレビ司会者が言っていた「戦争を望む者は誰もいないのだから…」というのも間違いである。

現在発生している大量難民がなぜ生じたのか、誰に責任があるのかを論じた「米による戦争犠牲者である難民への欧の残酷な待遇」(創造デザイン学会、8/25 掲載)の冒頭にこう言っている――

「戦争地域、迫害、あるいは貧困と失業を逃れてきた難民たちは、世界で最も歓迎しない人々だ。こうした何百万もの、アフガニスタン、イラク、シリア、リビア、イエメン、ドンバス地区などから、ヨーロッパや、自分の隣国に安全な避難場所を求めてやってきた人々に対して、全面的に責任を負うべきはアメリカである。」

正確には、アメリカおよびアメリカの犯罪に加担する者たち(メディアを含めて)であろう。難民はまずゴムボートなどで海を渡り、ギリシャに向かう者が多いようだが、その航海中に、また上陸してから目的地までの間に、さらに目的地についてから、どんな恐ろしいことが待っているかについては、この論文(や他の関連論文)を読んでもいただきたいが、私は注釈に、大抵の人は「こんなことは、この時代にあってはならないことだと思うだろう」と書いた。これが究極の理不尽な地獄であるのは、これが自然災害で起こったことでなく、このすべてが完全に避けられたことで、これら大量の難民を受け入れる側の人民が、彼らを拒否したり冷遇したりしても、それを責めることができないことである。

また喩え話で説明しよう。私がある町の悪魔的な独裁町長だったとして、あるとき隣の町を焼き払ったとしよう。隣の住民たちは私の町の住民たちに、どうか間借りをさせてくれと泣きつくか、要求してくるだろう。しかしわが町民は全く預かり知らぬことだから、簡単に応ずるわけがない。いざこざを解決するために、私がメディアと共謀して自分の悪事を隠し、隣の住民を、他人の家に侵入し、不当な要求をする犯罪者だとして宣伝したらどうなるか? これ以上の悪は考えられないが、今それが起っている。

御用メディアの責任について、別の論者は「永久に騙されやすいアメリカ人」(8/22)でこう言っている――

「NPR 報道によれば、シリアには現在 200 万人のシリア難民がいて、これまでに 25 万人のシリア人が殺された。NPR は、この殺人と膨大な数の人々の移動がなぜ起こったのかについては、何も言わなかった。あたかもこれらの人々の窮境が、原因もなく降って湧いたかのようなだった。ワシントンが、ISIS、アルカーイダ、トルコ、米及び NATO 空軍、ワシントンの中東従僕国を、シリアに向かってけしかけたという事実には触れなかった。」